

書評

病跡学と臨床描画の交点

牧瀬英幹 著『精神分析と描画』

——「誕生」と「死」をめぐる無意識の構造をとらえる——

松 本 卓 也*

玉露のような色鮮やかな装丁につつまれ、毛筆のような書体がふんだんに用いられた本書『精神分析と描画』は、ラカン派精神分析がもつある種のインパクトを本邦において受け止めることを真剣に検討した「日本的」な著作である。「日本的」という印象は、なににも装丁や書体といった外面的なところに限られるわけではない。本書には、傑出人(作家や芸術家)の創造性を精神医学や精神分析の手法によって解明する学問である「病跡学」に属する論文が5つの章にわたって収録されているが、著者の病跡学的研究の興味は、ある一時代の日本人における狂気と創造性の関係にほぼ集中している。すなわち、第3章の「鯨絵」、第4章で取り上げられる月岡(大蘇)芳年(1839-1892年)、第5章の佐伯祐三(1898-1928年)、第7章の熊野比丘尼、第8章の正岡子規(1867-1902年)などの、近世から近代への移行期、すなわち近代化という「危機」の時代の日本における狂気と創造性の関係が本書では集中的に取り上げられているのである。

他方、本書の残りの部分である1章、2章、6章、終章で論じられているのは、臨床描画である。病跡学と臨床描画という2つの組み合わせは、もちろんこれまでも三好暁光などの先例があるものの、著者はそこからさらに一歩進み、「両者を分けて考えるのではなく、両者に共通する接点を積極的に見だし、検討を進めていくこと」(8頁)にこそ意味があると考えている。

では、この2つを並べることにはどのような

意義があるのだろうか？ それは、一方の病跡学は近世から近代への移行という「時代精神の危機」を創造性によって乗り越えた人物を対象とするものであり、他方の臨床描画が「個人史における精神の危機」を治療法としての描画によって乗り越えることを目論むものであるという構造的共通性に求められる。すなわち、病跡学と臨床描画はともに、「危機」において何かを「描く」ことによって主体の再生を図ろうとする試みを取り扱う学問であり、本書は「描く」ことがもつ主体再生的な効果を、病跡学と臨床描画の両面から裏打ちしあうように検討しているのである。

では、本書が取り上げる「危機」とはいったい何だろうか。第3章で取り上げられる「鯨絵」の場合、それは、黒船来襲と安政の大地震であり、それらの危機のあとにいかにして生活の基盤を立て直し、再生産を行っていくかという問いである。第4章で取り上げられる芳年の場合、それは1853年という時代の転換点に浮世絵師としての創作を開始した彼自身が直面した、江戸から明治へのドラスティックな転換である。第5章で取り上げられる祐三の場合、それは西洋美術との関係のなかでアイデンティティを失いつつあった日本の美術がいかにして自立するのかという問いである。これらのケースはいずれも、「これまで自明視されてきた秩序が崩れさったあとの無秩序状態から、いかにして秩序を立ち上げなおすか」という共通の問いを生きている。芳年や祐三をはじめとするそれぞれの傑出人は、日本における近世から近代への移行という危機をたったひとりで引き受け

* 京都大学大学院人間・環境学研究所, Takuya Matsumoto: Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University.

ることから発病に至り、創造行為によってそこから回復したとみることができるのである。

これらのケースは、精神分析的な——とりわけラカンのな——問題意識にとってきわめて範例的である。というのも、ラカンに従うならば、精神分析の誕生それ自体が危機の時代と密接な関係をもっていたからである。詳しく説明しよう。ラカンによれば、フロイトによって精神分析が生み出されたのは、「父親のイマージの社会的衰退」が明らかになった危機の時代のことである。通常、フロイトの精神分析には時代的な制約ゆえに家父長制的なバイアスがみられる、という批判が向けられるが、精神分析はむしろ家父長制の危機の時代に現れたものなのである。このことは、統合失調症という病が——ほぼ完全な症候学と経過を伴って——登場したのが近代のあとであったこととおそらく無関係ではない。この意味では、統合失調症者とは、父（＝君主）が厳然と存在した時代から、父の死のあとに父性を内面化せざるをえなくなった時代への移行、すなわち君主制権力の時代から規律権力の時代への移行において、父性の内面化という青年期の課題に適応しそこなった「適応障害」であるといえる（これを敷衍すれば、現代においては、規律権力の時代から安全装置ないし制御社会への移行における「適応障害」が、順方向においては解離性障害、逆方向においては自閉症スペクトラム障害として出現したように思われるが、ひとまずそれは措く）。ラカンが論じているように、一方の神経症者はフィクションとしての父を信じ、父が用意した幹線道路を融通無碍に通ることができるのに対して、他方の精神病患者はそのフィクションに騙されないがゆえに、彷徨いながら妄想の小道を進むことによって危機からの再生を成し遂げるのである。

本書の病跡学的研究は、精神病患者にみられるこのような危機からの再生をまさに取り扱っている。たとえば、第4章の芳年のケースでは、「父なる「江戸」との間に葛藤する「明治」としての息子の関係」（102頁）が注目される。「芳年の苦悩は、まさに時代の〔＝江戸から明治へ

の〕「断絶」とみずからの「幼児期」と〔青年期との〕の「断絶」が重なり合ったこと」にある。芳年は、この断絶にみられる「『論理的な飛躍』を位置づけるという問題を自分ひとりの責任として受けとめようとしていた」（103頁）と考えられる。すなわち、芳年は日本の近代化と自身の自立の両者を重ねあわせたところにおいて躓き、その躓きを自分ひとりで解決しようとしていたのであり、ここに〈父の名〉の欠如を妄想形成において解決する精神病患者の姿を確認することができるのである（112頁）。

最後に、本書が取り上げるもうひとつの危機である、個人史における精神の危機を一瞥しておこう。本書で取り上げられるのは、（一例を除いて）そのすべてが幼児期（おおむねエディプスコンプレックスの導入以前）の子どもの生じた精神的危機のケースである。それらのケースに対して、著者は自ら考案した「描画連想法」を用いてアプローチする。描画連想法は、スクイグルのように紙の上に書かれた絵に解釈をいれながら、「さっと紙をかえる」、すなわち描く紙を交換することによって区切りを入れることによって、連想を展開させていく技法である。これは、「論理的連関を時間的同時性として再現する」という特徴をもつ夢（ないし他の無意識の形成物）をいわば紐解くように、「時間的同時性のもとに再現された描画に論理的関係性を取り戻す試み」（33頁）である。この方法の発明だけでも本書は揺るぎない価値をもっているが、そのことは本書の症例を読めばすぐに看取されることであろう。

端的に言って、本書の症例は、精神分析における解釈はどのようなものであるべきか、という古い問いについての議論を再活性化させる力をもっている。第1章の症例では、暗示や誘導的な解釈は用いられておらず、解釈はラカンの「区切り（scansion）」に専念している。この症例の子どもは、雲を描いたときにそれを「赤ちゃん」と名指している。この言葉は自発的かつ突然に語られており、その言葉の出現を契機として「穴が空いている木＝お母さん」「穴＝子宮」「鳥＝赤ちゃん」と解釈可能な豊かな幻想が

展開している (24 頁)。つまり、ここでは描画をきくことが『物語り』を生み出していくプロセス』となっているのである (31 頁)。他方、第 2 章や終章の症例では解釈はむしろ「誘導的」であり、たとえば、「子どもはやや緊張した様子で、『雷がいっぱい出てきた』と言い、なぐり描きを行った。さらに、『ここにウンチがいる』と言いながら、そのなぐり描きの一部を塗りつぶすようにしてウンチ (中央のより黒い部分) を描いた。『お母さんはどこにいるの?』と尋ねると、子どもは、『ここにはいないよ』と言い、ふたたびなぐり描きを行った。そこで、『じゃあ、お母さんはどこにいるのかな?』と問いかけ、さっと紙を引き、新しい紙と交換した」(47 頁、強調は引用者) とあるように、かつてあっ

たドゥルーズ＝ガタリの論調からは「患者をエディプスの枠のなかに押し込んでいる」と批判されかねない解釈もみられる。しかし、ここでの解釈はそのような批判よりもっと繊細なことが行われており、それは母の不在、すなわち母がほかの場所にいることを示唆する、という意味でのファルス的な解釈なのである。評者は、ぜひとも他学派の臨床家から、本書の症例について意見を聞いてみたいと思う。そして、本書が発明した描画連想法が、その対話のなかでさらなる発展を遂げることを楽しみに待ちたいと思うのである。

誠信書房、A5 版、254 頁、2015 年、本体 3,200 円 + 税